

プロローグ

男の子にとつての「女子」で、もつとも大事な存在は誰だろう？

恋人？ 婚約者？ 夫婦？

ううん、「私」は違うと思う。だって、一番大事なのは、「彼女」なんかじゃない。

家族だ。そう、たとえば母親、姉……そして「妹」。

だから、お兄ちゃんにとつて一番大事なのは、私のはずだ。

私……連城灯里は確信していた。そうじゃないなら、そうしなければならぬ。

「大丈夫ですよ？」

風に揺れる三つ編みの髪。それを私は指で払う。

弱気になっちゃダメだ。私だって、小学校でも、前に通つてた中学でも、可愛いって評判だったんだし。芸能事務所にスカウトされたこともある。

私の三つ年上のお兄ちゃんは、高校生になつて彼女ができたらしい。彼女というか、政略結婚で押し付けられた子で、婚約もしているんだとか。

すごく可愛い北欧系の子で……。

「でも、そんな子より、私のほうがお兄ちゃんを幸せにできますから！　だって、わたしはお兄ちゃんと結婚だつてできるんだもん」

表向きにはわたしとお兄ちゃんは異母兄妹だ。でも、お兄ちゃんは知らないけれど、私とお兄ちゃんは血が繋がっていない。

最初に聞いたときは、そのことがショックだった。私とお兄ちゃんは本物の家族じゃない、と思つたからだ。

でも、今が違ふなら、本物になつてしまえばいい。家族になる方法の一つじゃない。

血が繋がってなくても、本物の妹になれる。ううん、血が繋がっていないから、本物の奥さんにもなれる。

私をここに連れてきてくれた「あの女性」は、そう言つてくれた。

私は巨大な校舎を見上げた。名古屋の私立講文館中学・高等学校。

中学一年生の私は、ここに通ふことになる。

そう、お兄ちゃん……連城透も通つてゐる、この学校に。

第一章 北欧美少女VS妹

北欧美少女の婚約者。

連城透はごく普通の高校生だった。だけど、透は、フィアンセができたことで生活が一変した。

愛乃・リュティ。北欧系の血を引いている彼女は、金髪碧眼の美少女。学校でも一、二を争う容姿だと評判だ。

そんな愛乃が政略結婚で透の婚約者になり、一緒の家に住み……そして、彼女にもなった。それに加えて、元婚約者の従妹・近衛知香、クラスメイトで友人の桜井明日夏まで同居するようになった。後輩の女子中学生、水無瀬真衣にまで好意を寄せられるようになったし……。だが、豊臣梨々華という先輩美少女が現れたことで状況は一変。梨々華が強引な婚約者となり、透と愛乃の婚約は破棄されてしまった。

ところが、さらに状況は変わった。愛乃が本国のリュティ・グループの力を借りて、透を奪い返したのだ。豊臣梨々華は破滅して透のメイドに堕ち、婚約者はふたたび愛乃に戻った。そのうえ透の保護者も、近衛家の秘書・時枝冬華から、リュティ家秘書のエミリア・エーンルットに変更されている。つまり……。

制服姿の愛乃が、屋敷の居間で満面の笑みを浮かべる。

「これで、24時間365日、頭の中から爪先まで、透くんはわたしのものつてことだよね？」

透は困ったような、嬉しいような気持ちになった。どう反応すればよいのだろうか？

今、透たちがいるのは、新しい家だ。その居間で机を愛乃、知香と囲んでいる。

この家は名古屋市昭和区の南山地区にある。名古屋を代表する自動車会社の、創業家の屋敷とかもこの地区にある。

透たちが住むのは、その周辺でも豪華なお屋敷だ。和風の建物。

もともとは室町家という近衛家の分家の屋敷だったらしい。もつとも室町家は没落している。だから、それを水無瀬家……後輩の水無瀬真衣の家が買い取ったのだ。

そして、京都から戻ってきた後に、透たちのための住むところとして使わせてくれているというわけだ。

近衛家の庇護から離れた以上、透は元々住んでいた家にはいられない。近衛家が用意してくれたものだからだ。

今はリュティ家・水無瀬家が手を組み、連合のような形で透と愛乃を保護してくれている。

透は肩をすくめた。

「もともと俺は愛乃さんのものだよ。でも、よく本国のリュティ・グループを動かすことなんてできたね」

それができるなら、最初から近衛家との政略結婚、つまり透との婚約なんて必要なかったの

では？

透の疑問に、愛乃は微笑んだ。

「そんなことができるなんて、最初はわたしも思っていないかったから。秘書のエミリアに教えてもらって、お母さんの立場を弱めて、時間をかけて初めて実現したんだもん」

「愛乃さん、俺が思ったよりもずっと策士だよ」

「わたしは守りたいものができたから。そのためなら、なんでもするよ」

守りたいもの、というのは透のことだ。それがわかって、透は頬が熱くなるのを感じた。

とはいえ、問題は色々ある。

第一に、近衛家との関係だ。これまでは近衛家秘書・時枝冬華が透を庇護してくれていた。

冬華は何年も透の面倒を後見人として見てきてくれたいたし、近衛家内部の実力者でもある。色々と思惑も持っているが、親切で優しいお姉さんでもあった。

だが、今はその力を頼りにすることはできない。リュティ家に金を積まれた結果、透の母親は透の後見人をリュティ家秘書・エミリアに変更した。

結果として、透・愛乃は近衛家を、そして冬華を敵に回したかもしれない。近衛家としては、透を使ってリュティ・グループなり、豊臣エレクトロニクスなりを手に入れるはずだった。だが、それは失敗した。冬華にしても、透を近衛家の後継者にして、なんらかの目的……おそらく、近衛家への復讐を果たそうとしていたのに、透はリュティ家のものになってしまった。

であれば、近衛家からの反撃があってもおかしくない。

透の幼馴染、元婚約者の近衛知香が隣でため息を吐く。

「というか、透って、冬華さんに次期当主になるなんて約束してたわけ？」

「ごめん。相談できてなかったんだけど、みんなを守るために必要だと思っただよ」

「当主の嫡女の私の立場はどうなるのよ！ ま、まあ、透が私の婿になるなら、何も変わらないし、全然いいんだけど」

知香が照れた様子でそんなことを言う。だが、愛乃はそれを聞いて、ふふつと笑う。

「でも、今の透くんはわたしのものだから。透くんのお嫁さんのわたしも、近衛家の後継者になる資格があるよね」

愛乃はたしかにそんなことを言っていた。

本気ののだろうか。そうすれば、当初の目的だったリュティ家、近衛家の統合は、リュティ家主導という逆の側から成立してしまうことになる。

もつとも、それを認める人は多くないだろう。知香だって、「透は、私と愛乃さんで共有するの！」と主張している。

それに、近衛家の現当主も、透・愛乃を後継者とするメリットはない。時枝冬華にとつても、利益がないのは同じこと。

第二の問題として、この家に住むメンバーは以前からの引き継ぎだ。透と愛乃、それに知香。さらに親が不祥事でいなくなった、メイドの桜井明日夏。同じく、メイド堕ちした豊臣梨々華先輩。

愛乃と知香は仲良しだが、他のメンバーはまちまちだ。透をめぐるライバルでもある。そもも知香あたりは、この家にいることを正当化する理由も怪しい。

加えて、水無瀬家からの監視役として、メイドの南小路咲綾みなみこうじさきあやがいる。……つまり、羽目を外しすぎて、透がすっかり愛乃たちを妊娠させないように、というお目付け役だ。健全な両親のおかげで、水無瀬真衣はこの家には同居できないから、彼女の代理という面もある。しかし、これでは、どう考えても、平穏な日々を送れそうにはない。

知香が言う。

「まずは近衛家との関係修復をしないとね。まあ、そこは私がなんとかするわ」

「大丈夫？ 知香は近衛家の跡継ぎかもしれないけど……近衛家は一筋縄ではいかない存在だし」

近衛家当主、時枝冬華以外にも、近衛家の関係者は無数にいる。

分家の水無瀬家もその一つだし、この屋敷の元の持ち主の室町家もそうだ。御連枝衆ごれんししゅうと呼ばれる親族たちもいて、真木島家など有力な家もある。あるいは連城家だつて、近衛家の一門でもある。加えて経営幹部や、グループ各企業の重役たちも含め、常に権力闘争が行われている。そんな中を知香一人でどうにかできるとは思えない。

だが、知香は首を横に振った。

「今の私は一人じゃないわ。だって、透がいるものね」

くすつと知香が笑う。その純粹な笑顔にどきりとした。

少し前なら、透と知香の仲は険悪だった。それが今では昔みたいに親しくできている。

それもこれも、愛乃のおかげかもしれない。愛乃は知香とも親友のように仲が良い。知香も「愛乃さんもあるし」と付け加え、顔を赤くする。

とりあえずは、現状を前提に、平和に暮らす方法を探すしかない。

今のところ、透たちはまだ高校生なのだから。

ただ、長期的にもそれでいいのかは、じっくり考えたほうが良いかもしれない。

以前は透は愛乃を助け、守る立場だった。その代わり、愛乃は透を支えてくれると約束してくれた。

でも、今は違う。今、透は愛乃の「所有物」になった。愛乃のリユティ・グループの庇護のもとに、透はいる。

一方的に、愛乃から支えられるだけの立場になってしまった。

もちろん、愛乃はそれでもいいと言ってくれると思う。

だけど、透も愛乃を守るようになりたい。リユティ・グループだとか、近衛家だとかに振り回されず、自分の力で愛乃を幸せにしてあげたい。

そのためには……どうすればいいか。

考える時間が必要だ。

透は立ち上がった。

「ちょっとシャワー浴びてくるよ。最近暑いから……」

愛乃と知香が顔を見合わせ、そわそわとした様子になる。

透はそんな二人に釘を刺した。

「一緒に入るのはダメだからね？　水無瀬家に怒られちゃうよ」

「はい」

愛乃が残念そうにうなずいた。

油断も隙もない。

もつとも愛乃が透に情熱的に迫ってきてくれるのは嬉しいのだけれど。

風呂場、しかも裸で迫られたら、何をしてしまうかわからない。愛乃だつて名家の令嬢なのだし、傷物にはできない。それに……透はまだ自信がなかった。この先もずっと、透は愛乃のそばにいたい。

だけど、それができるかはわからない。愛乃は力を手に入れて、透を支えてくれるつもりだ。だけど、透のほうはそこまで確信を持ってない。愛乃を守るための力を手に入れるまでは。

透はともかく、風呂場でシャワーを浴びることにした。シャワーを浴びながら、今後のことも考えたい。

やはり豪華なお屋敷だからか、風呂場も広い。前の家よりもさらにスケールが大きく、大浴場だ。露天風呂まである。

これなら愛乃たちとも一緒に入れてしまふな、と透はちよつと思う。

そのために用意したのではないかとすら一瞬思ってしまう。

そして、ある意味ではその想像は当たっていた。

透が洗い場に腰掛けたとき、脱衣場への扉が開く。愛乃たちがやってきたのかと思つたが、違つた。

そこにいたのはメイド服の二人の美少女だつた。

一人は桜井明日夏。透の友人で、今は透のメイドになっている。前もこんなふうに風呂場に突撃されたことがあつた。

だが、今回はもう一人、セツトだ。豊臣梨々華。二年生の先輩で、こないだまで透の「婚約者」だつた少女。

超大金持ちの元・お嬢様。今は豊臣家の破滅によつて、彼女もメイドとなっている。明日夏は平気そうな表情でにへらと笑い、梨々華は羞恥で顔を赤くしている。

透は恐る恐る尋ねた。

「二人とも、何をしに来たの？」

これでは考え事をするところではない。

明日夏がえへんと胸を張つた。明日夏の胸は小さいわけではない。けれど、愛乃たちと比べると、大きくはないほうだ。けれど、メイド服自体が胸の露出度が高いから、かなり強調されて見える。

「当然、ご主人様へのご奉仕。決まつてるじゃん！」

「いやいやいや、決まつてないよ。俺と桜井さんはクラスメイトで、友人だし……」

「でも、今はご主人様とメイド。そうでしょ？」

そう言われれば立場はそうなのかもしれないが、全然実感はない。

明日夏がくすつと笑う。

「だから、連城は黙ってあたしに奉仕されてればいいの」

そう言うのと、メイド服のまま、明日夏は透の前にひざまずいた。胸の谷間に視線が引き寄せられる。しかもスカートがめくれ、パンツが見えている。

赤の大胆なショーツだ。明日夏は気づいて、「連城のえっち……」と言うが、隠そうとはしなかった。

「パンツ見られるぐらい、平気だよ。連城には……もつとすごいことをするんだもん」

「も、もつとすごいことって……？」

「近衛知香にはできないようなこと」

そう言うのと、明日夏はメイド服の胸元をはだけた。そして、手にボディソープを取ると、その白い液体を胸に垂らす。

その淫靡な光景に透は目が離せなくなった。

そのまま明日夏は透の胸板に、自分の乳房をくつつける。

「ご主人様の身体を洗ってあげる！」

「ちよ、ちよっと待ってよ！ こんなことをしたら、南小路さんに怒られる……」
屋敷の風紀取り締まり係、メイド長の南小路咲綾が許すわけがない。



ところが、明日夏はぬるぬるとした胸を透の胸板とこすり合わせ続け、「あんっ♡」なんて甘い声を上げる。

そして、小首をかしげる。

「そんなことないよ。むしろ咲綾さんは勧めてるぐらい」

「へ!？」

「あたしたちが連城を『すつきり』させてあげる。そうすれば、リュティさんや知香に手を出さずに済むでしょ？」

「それはそうだけど、だからって桜井さんたちに手を出してよいわけじゃないよ」

「あたしたちはいいの。だって……あたしたちは帰る場所もない、ただの庶民メイドだもん。咲綾さんは良いところのお嬢様かもしれないけど、メイドとして水無瀬家に絶対服従だし」

「それは違うよ。桜井さんたちも、愛乃さんたちも、同じ女の子だよ」

「連城がそう言ってくれるのは嬉しいけど、あたし、近衛家を買われた立場だし」

明日夏の父による、近衛グループでの多額の横領。娘の明日夏は路頭に迷い、その代償として近衛家に拾われたのだ。それを冬華の配慮で、透と同居できるようにしてくれていた。

けれど、状況は変わってしまった。明日夏の身柄は今のところ、知香の権限で保護してくれているが、今後、どうなるかわからない。明日夏の身の安全を守るためにも、近衛家との関係改善は必要だ。

明日夏は微笑む。

「それにね、悪いことばかりじゃないもの。リュティさんや近衛知香と違って、連城はあたしとはエッチし放題ってことでしょ？」

「え、エッチし放題ってそんな……」

「連城、言ってくれたよね。あたしたち、友達だって」

「もちろん、桜井さんは大事な友達だよ」

「なら、セフレってことでいいんじゃない？」

明日夏がとんでもないことを言い出す。

「桜井さんをそんなふうに扱うなんて、できないよ」

「どうして？ こないだだって、連城はあたしでエッチな気持ちになつてた。なら……いいよね？」

明日夏はそんなふうに言い、乳房をますます強く透に押し付ける。乳首がこすれ、明日夏が「ああんっ♡」とあえぐ。

「知ってるでしょ？ あたし負けず嫌いだもの。近衛知香や……リュティさんより、あたしのほうが連城を満足させられるから」

そして、明日夏は不意打ちで、透にキスをしようと迫る。

だが、愛乃とすらまだキスをしていないのに、明日夏とキスなんてするわけにはいかない。秘書の冬華には強引に唇を奪われてしまっているけれど……。

透が身をかわすと、明日夏は唇を尖らせる。

「遠慮なくてもいいのに」
 「いやいやいや、そういう問題じゃ……だいたい、桜井さんってそんなキャラじゃなかったよね？」

「なに？ あたしが淫乱になったって言いたいなの？」

「そういうわけじゃないけど、えっと、他の男子と付き合ったことか……」

明日夏の最近の行動は、あまりにも大胆だ。実は慣れていたりのかと疑ってしまうほど。だから、透は思わずそんなことを口走ってしまう。

「あるわけないでしょ。だって……連城のこと、ずっと好きだったんだし」

明日夏がはつきりと否定する。そして、ほんのりと頬を赤くした。

ちよっと暴走気味なもの、透への好意を隠す必要がなくなったからなのだろう。

明日夏が涙目で透を睨む。

「だいたい、連城はあたしに黙ってリュティさんと京都に行っちゃうし」

そういえば、京都への愛乃との逃避行は、明日夏には黙って出かけてしまった。知香は実は知っていたらしいけれど、明日夏は寝耳に水だったわけだ。

近衛家に勘付かれないためとはいえ、明日夏には悪いことをしたと思う。帰ってきたときに謝ったけれど、明日夏は許してくれていないらしい。

「だから、連城に捨てられないようにしたいの」

「捨てたりなんてしないよ」

「嘘つき……。あたしのほうが先に連城のことを好きになったのに、愛乃さんに取られちゃうし。でも……」

明日夏は透の股間を見て、ふふつと嬉しそうな顔をする。

「身体は正直だよ」

「それ、普通は男が言うセリフ……」

「連城のが元気になってる……！」

「恥ずかしいから言わないでよ。だいたい誰のせいだと……」

「あたしのせい、だよ。責任取ってあげる」

以前みたいに、口と手で奉仕するのか……と思いきや。

明日夏はさらに大胆な手に出た。

突然、スカートの下に手を入れると、パンツを脱いでしまう。脱ぎ捨てられたショーツを横目に、明日夏は透の上にまたがろうとした。

つまり……

「す、ストップ！ ストップ！ それをする……」

「子作りになっちゃう？ でも、あたしは嬉しいよ？」

「桜井さん……」

「あたし……連城の子供だったら、産んでもいいもの。ううん、産みたいの。このままだと、あたし、近衛家に連城と引き離されちゃうかも」

「たしかに俺の子を妊娠していれば、話が違いかもしれないけど」
 「それに。あたしの家族、みんななくなっちゃった。だから、新しい家族がほしい」
 そんなふうにささやき、明日夏は腰を下ろそうとし……。

「い、いけませんわ!」

突然、梨々華が割って入り、背後から明日夏を羽交い締めにする。

「ちょ、ちよつと! 梨々華先輩! やめてください!」

「明日夏さんが抜け駆けするなんて、透さんの初めてはわたくしなんです!」

はずみで明日夏に挿入してしまうのではないかと思ひ、透はひやりとする。

だが、梨々華と明日夏がもみ合いになり、そのまま床に倒れこんでしまう。

怪我をしていないか、透は心配になった。だが、二人とも平気そうだ。

いがみ合う猫のように、明日夏と梨々華が睨み合う。

というより。

「いつのまに、二人は仲良くなったの?」

「連城には仲良さそうに見えるの?」

「だって、名前で呼びあっているし」

明日夏さん、梨々華先輩、なんて親しげに呼んでいるので、透は気になったのだ。この二人

は面識があったのだろうか。

ああ、と梨々華がぼんと手を打つ。

「ほら、わたくし、高等部の生徒会の副会長でしょう? 明日夏さんも中等部の生徒会に入っ

ていたことがありますから」

明日夏が苦い表情をする。

「生徒会長になるつもりで、近衛知香に負けたんだけどね」

知香VS明日夏のエピソードの一つだ。たいてい明日夏が残念ながら負けているけれど……。

生徒会活動の縁で、もともと梨々華と知らない仲でもなかったらしい。

明日夏が補足する。

「まあ、名前で呼ぶようになったのは、梨々華先輩がメイドになってからだけどね。一応、メイド仲間なわけだし」

心ならずもメイドになった仲間ということで、謎の連帯感を持ったらしい。なので、二人は意外と仲良しのようなのだ。

明日夏が「それにしても、生徒会副会長が後輩男子の性奴隷って、大丈夫なんですか?」なんて梨々華に言う。梨々華は「性奴隷じゃなくて、メイドです!」と顔を真っ赤にして怒る。

ただ、これは猫のじゃれ合いみたいなもので。

透はちよつとほつとする。明日夏は愛乃とはさほど親しくないし、知香はライバルだ。梨々

華は愛乃と互いに苦手意識があるようだった。梨々華は知香とはそれなりに親しかったようだが、京都での騒動で敵対している。

そういうわけで、明日夏、梨々華は孤立しがちだったので、二人が仲良しなのは悪くない。

ただ、そうすると、愛乃・知香VS明日夏・梨々華みたいになってしまうのも、まずいか……。透はいろいろと頭を悩ませる。この屋敷に住んでいる男は透一人。そして、彼女たちの好意は透に向けられている。

透がしつかり、愛乃たちを守る必要があった。

それに、屋敷の外では、後輩の水無瀬真衣も透の結婚相手になろうと画策しているし。考え事をしていたら、明日夏が梨々華の胸をなぜか背後から揉んでいた。

「梨々華先輩……胸がおつきくて羨ましい。この胸で連城をたぶらかすつもりなんだ？」

「や、やめてください！ あうっ♡ あん、乳首いじっちゃダメっ♡」

目の前で百合百合しい、えつちな光景が繰り広げられていて、透は思わず見入ってしまう。

二人への欲情を感じ、慌てて透は風呂場から逃げ出すことにした。

「あつ、連城！」「透さん！」

透は恥も外聞もなく逃げ出すことにした。二人に手を出したなんてことになれば、愛乃に顔向けできない。

（どうしたものかなあ）

なんだか、成り行きでどんどん予想外な方向に話が転がっている。透は愛乃と二人きりの新生活、いや結婚していいから同棲生活を楽しみたい。

そう。それを自分の力で実現できるだけの力がほしい。

透は自室に戻って考えた。

今はリユティ・グループを通して、愛乃が透を支えてくれる。だけど、やっぱり、それではいけないと思う。男として。透が愛乃の所有物になるのではなく。透が愛乃を自分のものにして、守ってあげたいのだ。

古い考えだと言われるかもしれないけれど。

だいたい、リユティ・グループと愛乃の関係だつて、またいつ変わるかもわからない。

愛乃をあらゆる敵から守るために。透はやっぱり近衛家の当主になるのが良いのかもしれない。一度目指すと決めた道でもある。もちろん、愛乃と共に。

冬華にだって、また協力を仰ぐことができるかもしれない。

それに、今のままではまずいのだ。愛乃との関係だけの問題ではなくて、他の女子たちもいる。

知香が望むようなハーレム生活にますます近づいてしまっている。一方で、透は知香や明日夏、梨々華たちを見捨てることもできない。

このとき、透の頭には浮かんでいなかったが、あと二人曲者がいたのだ。

一人はメイドの南小路咲綾。そして、もう一人は……透自身の妹、連城灯里だ。

☆

講文館中学・高等学校。透と愛乃たちが通う、男女共学の私立名門中高一貫校だ。

公立学校が圧倒的に優位の愛知県において、旭丘や岡崎、一宮高校などの公立校を押さえ、県内ナンバーワンの進学実績を誇る超進学校でもある。

その講文館では高校からの外部入学組がいる他に、編入試験が随時行われている。これはかなり難関だが、東京や大阪にある姉妹校からの転入は比較的やさしい。

透がそんなことを思い出したのは、放課（名古屋の方言で、休み時間のこと）に、隣の席の女子、秋川古都香が話題を振ってきたからだ。

可愛いと評判の一軍女子、古都香は明日夏の友人でもある。最近では愛乃とも仲が良いらしい。明るいが、自己主張が強いタイプで、ひそかに透は人格者だと思っていた。

その古都香が興奮した様子で目を輝かせている。

「ね、ね、連城くん？ 知ってる？ 知ってる？」

「何を……？」

「中等部の一年にさ、すっごく可愛い子が転入してきたらしいの！」

「へえ」

「……反応薄いね！ 男子なら、可愛い女子が来たって言ったら『うおおおおお！』ってなるものじゃないの？」

「だって、俺には愛乃さんがいるからね」

「おつ、お熱いねえ。さすが婚約者」

「だいたい、隣のクラスとかならともかく、中一なんだよね？ 三つも年下だと、ちよつと

……」

中高一貫校とはいえ、中等部と高等部はそれほど交流があるわけでもない。中高共通の部活で一緒なら話は別だが、そういうわけでもない。

古都香だって、それはたぶん同じはずだ。なのに、何がそんなに気になっているのだろうか？

古都香が満面の笑みを浮かべる。

「でもね、その子、あの聖アニエス女学院からの転校なんだって」

「聖アニエスってあのお嬢様学校の？」

「そうそう。芸能活動している娘とも通っているっていうあの東京の名門校！」

たしかに聖アニエス女学院は東京の有名中高一貫校だ。進学校だけでなく、スポーツも強いし、何より芸能人や有名人の娘が多い。東京ならでは、だ。

だが、ミッシェン系の女子校だから、講文館の系列校ではない。

それなのに、編入試験を受けてうちに入るのには珍しいと思う。しかも、まだ中学一年生。そういうえば、透の親族にも、聖アニエス女学院に通っている子がいる。こないだ入学したばかりなので、中学一年生のはずだ。

ともかく、古都香が興奮しているのは学校名だけが理由ではなさそうだ。

「それでね、その子の名前が——」

そこで古都香は言葉を止め、後ろを振り向いた。透もつられて後ろを振り向くと、愛乃が真後ろに立っていた。

愛乃がにつこりと笑っている。

「秋川さん、透くんはずいぶんと楽しそうだね」

愛乃の庄にたじろいだ様子で、古都香が「あはは」と笑う。

愛乃がひしと透の腕をつかむ。そして、頬を膨らませた。

「透くんはわたしのものだよ」

「連城くんとは話してただけだよ。わたしなんか嫉妬しなくても」

「秋川さん、可愛いから。透くんが好きになっちゃったら困るもの」

「褒めてくれて、ありがと。でも、わたし、リュティさんみたいな美少女じゃないもの」

「そんなことないよ。秋川さんは明るくて優しいし……」

愛乃が顔を赤くする。実際、古都香は人気者だ。

友人同士になった愛乃と古都香は、お互いを褒めあつて、なんだか照れている。むしろ透が置いてけぼりの気分だ。

愛乃が小首をかしげる。

「二人は何の話をしていたの？」

中等部に転校生が来た話だと説明した後、「そういえば」と透は続けた。

「秋川さん。その転校生の名前を言いかけていたけど」

「そうそう！ 珍しい名前なんだよね。苗字がレンジョウウっていうの」

「れんじょう……？」

「城が連なる、で連城。連城くんと同じ苗字だね？ そんなに見えない名前だから、もしかして親戚かも、なんて」

透は愛乃と顔を見合わせる。そして、透はおそろおそろ尋ねた。

「その子の下の名前って、もしかして……」

透の質問は最後まで言葉にならなかった。

廊下側の扉がぱんと開け放たれたからだ。

教室中の生徒が一斉にそちらに注目する。

そこには小柄で可憐な女子生徒が立っていた。幼い雰囲気だけれど、とても愛らしい。

三つ編みの綺麗な髪が印象的だ。見慣れた中等部の制服だが、まるでアイドルのように可憐に見える。

「あれ、誰？」「すぐ可愛い……」

ひそひそとクラスメイトたちが話すほど、その子の容姿はずば抜けて整っていた。愛乃や知香に負けないぐらいだ。

ほとんどの教室の生徒は「可愛い」「誰だろう？」という感想を持ったと思う。

席を外していた明日夏が戻ってきて、古都香に「あの子って誰？」と聞く。

古都香は「あの子、噂になってる転入生だよ」と明日夏にささやき返す。

噂話好きな古都香は、実物まで見に行っていたらしい。

ただ、透は大多数のクラスメイトとも、古都香とも違った感想を持った。

つまり……鏡を見たら、おそらく透の顔は真つ青だっただろう。

正反対に、その女の子はとても楽しそうに、花の咲くような笑みを浮かべた。そして、つかつかとこちらまで歩み寄ってくる。

「こんにちは、透お兄ちゃん」

「……ああ、久しぶりだね。灯里」

冷や汗がだらだらと落ちるのを感じる。

愛乃たちは「透お兄ちゃん……？」と呆氣にとられている。

そんな愛乃たちに向かい、その転校生の女子はうやうやしくスカートの裾をつまみ、一礼する。

芝居がかった仕草だ。

「はじめまして、先輩方。私は連城灯里と申します。連城透の実の妹です」

愛乃と明日夏が顔を見合わせ、それから「妹……!?」と素つ頓狂な声を上げる。

クラスもざわついている。

古都香が「可愛い女子たちを侍^{はべ}らしているのに、妹まですごい美少女なんて……連城くんのハーレムはすごいね！」なんて横からかうように言う。

クラスメイトたちも「あの可愛い子が連城の妹……」「ずるい、うらやましい、ねたましい」なんて声が聞こえてくる。

だが、良い話ばかりではないのだ。



透はとつさに逃げようと考えたが、ここは教室。できるはずもない。愛乃が横からつんつんと透をつつく。

「透くん、妹さんがいるなんて、わたしには言ってくれなかったよね？」

「妹といえば、妹さんだけど、事情が複雑というか……」

あら、と灯里がぶくつと頬を膨らませ、胸を張る。

「私、真正正銘、透お兄ちゃんの妹です。血も繋がっています。半分だけけど」

「半分だけ？」

愛乃が不思議そうに尋ねる。つまり、と灯里は言う。

「異母妹なんです」

透は慌てた。

「あまり詳細に説明しなくてもいいよ。センシティブなことだし」

「私は気にしていませんよ？ 私が生児なの、別に隠すことでもないし」

灯里は微笑んで言う。

つまり、二人の父親、連城朗はクズだったのだ。彼は教え子だった近衛家の令嬢に手を出した。もちろん、それだけだったら、年の差はあっても純愛だったかもしれない。

だが、問題は透が生まれた数年後。朗は美人の飲食店の女性……まあ、水商売の女性と浮気をしたのだ。これを含むいろいろなトラブルで、透の両親は破局した。

その不倫で生まれたのが連城灯里だ。

なので、灯里は透と違って、母を通じて近衛家の血は引いていない。ただし、話し合いの結果として、連城の苗字は名乗っているわけだ。

灯里がとんでもない美少女なのも、母親譲りというわけなのだ。ついでに連城朗は他のこととはともかく、養育費の支払いだけはちゃんとしていたらしい。弁護士だからかもしれない。

それで、灯里は東京の名門女子校に通っていた……はずなのだが。

透はそこまで愛乃たちに説明した。愛乃たちが目を白黒させ、「へええ」とうなずいている。一連の事情はさておき、透にもわからないことがある。その灯里がどうしてここにいるのか。

灯里がえへへと笑う。

「お兄ちゃんに会いたくて。我慢できなくて、来ちゃいました」

「いやいやいや、『来ちゃいました』って学校は？ 家は？」

「今日からこの学校に通うんですよ？ ほらほら、わたしの制服姿、似合っています？」

灯里がくるりと一周してみせる。ひらりと短めのスカートの裾が揺れ、「おおっ」と周りの男子たちからどよめきが上がる。その反応を見て、愛乃も古都香も呆れた様子だった。

ぎりぎりパンツが見えないくらいだ。

にへらと灯里が笑う。

「あつ、お兄ちゃん。今、パンツが見えそうって思ったでしょう？」

「思っていないよ……。一応、俺、兄だしね。だいたい、そんな短いスカートを穿いたらダメだよ。まだ中学一年生なんだし」

「あつ、お兄ちゃんがお兄ちゃんっぽいんです！ 嬉しい！」

きらきらと灯里が目を輝かせる。

透は頭が痛くなってきた。

つまり、この異母妹は……。

「やっぱり、私……お兄ちゃんのこと、大好きです！」

灯里が透に正面からぎゅつと抱きつく。避けるわけにもいかず、透は仕方なくそれを受け入れる。むぎゅつと柔らかい胸の感触が当たった。

この異母妹は透のことを、大好きなのだ。透が困って逃げ出したくなるほど。

とはいえ、久々に会った妹を冷たく扱うわけにもいかず。

透は「はいはい」と灯里の背中を撫でた。灯里は「えへへ」なんて笑いながら、透の胸板に頬ずりをする。

それを見て、愛乃が「あつー！」と叫ぶ。

「透くんを抱きついていいのは、わたしだけなの！」

灯里がむむつと愛乃を睨む。

「お兄ちゃんに抱きつくのは、妹だけの特権です！」

「透くんはわたしのものになったの！ たえ妹でもダメなんだから」

愛乃が珍しく、いや、珍しくもないかもしれないが、剥き出しの嫉妬を露わにする。

透としても愛乃が嫉妬してくれるのは嬉しいといえば嬉しい。

けれど、一方で愛乃に申し訳ない気持ちにもなる。ただでさえ、家にはたくさんの女子がいるから……。

ただ、妹なんだから、そんなに過剰反応しなくてもいいのに、とは少しだけ思ってしまう。

とはいえ、透はぼんぼんと灯里の頭を叩く。そして、「いったん離れようか」と言った。明

日夏・古都香をはじめとするクラスメイトの視線も痛いし。

灯里が残念そうに透から離れる。「あとでいつでも、ハグぐらいできますもんね？」なんて灯里はつぶやいていた。

透は一番大事な質問をもう一度投げかける。

「それで、家はどうするの？ 父さんは頼れないし。灯里のお母さんの親戚とか？ 知り合いで頼れる人、いる？」

透の質問に、灯里は不思議そうに小首をかしげる。

「何を言っているんですか？ お兄ちゃんは」

「おかしいことを言ったかな。あ、寮とか？」

「むむつ。家族なんですよ。私も、お兄ちゃんの家に住みます。決まってるじゃないですか」
当然、という表情で灯里は告げた。